



テゼからの手紙

No. 270 特別号

LETTER 2011

チリからの手紙

テゼ共同体の院長、ブラザー・アロイスによって書かれたこの手紙は、24 のアジアの言語を含む 55 の言語に翻訳され、2010 年 12 月にオランダのロッテルダムで開催されたヨーロッパ青年大会において公表された。

この手紙は、2011 年に年間を通じて、テゼで開かれる毎週の集いや世界各地の集いで、黙想のためのテキストとして用いられる。

ラテンアメリカで2度目のテゼの国際大会を 2010 年 12 月8日～12 日にサンティアゴで開催することを、チリの青年司牧担当者で決定した時、2010 年がチリの人々にとって、これほどの試練と喜びの年になるとは思いもよびませんでした。チリで今年1年を通じて青年大会の準備にかかわったブラザーたちは、この試練と喜びを人々と共有することになりました。

チリの人々は、他のラテンアメリカの国々と共に共和国の建国 200 年を祝い、同時に、大地と海の猛威がもたらした大きな苦悩を味わいました。

2月の地震は、とりわけ貧しい人々に影響を及ぼしました。しかし、この国の魂の深みから生じた寛大さのほとばしりは、チリの人々を、逆境の中で結び合わせ、どれほど一つの家族であるかを示しました。多くの若いチリ人は、家と仕事を失った人々を助けようと足を運び、メディアサグアスと呼ばれる仮設住宅——小さな木造の小屋——を建てるために、時間と労力を差し出したのです。

同じ年、チリの先住民、特にマプチェ族の一部のグループは、長期のハンガーストライキを決行し、彼らの苦悩と要求を表しました。

その少し後で、鉱山事故にあった 33 人の鉱山労働者が地上に帰還した映像は、全国に大きな喜びをもたらしました。

12 月の初めに開催された国際青年大会には、チリそして南米全土から、何千もの若者たちが集まりました。それは、喜び、悲しみや挑戦を共有し、より人間的な世界の実現を求めて、一緒に模索する機会となりました。

この青年大会に、ハイチの青年を数名迎えることができたことは喜びでした。彼らの存在によって、わたしたちは、2010 年 1 月の大地震がハイチにもたらした大きな苦悩に思いを寄せました。彼らの傷は深く、癒やしからはまだほど遠いのです。もしこの国の政治的・社会的状況が許せば、サンティアゴ大会の後、2010 年 12 月末にロッテルダムで開催されるヨーロッパ大会までの間に、わたしはハイチを訪問する計画です。その訪問は、世界中の青年たちからの連帯の気持ちと彼らへの称賛——逆境のただ中で信仰によって立ち続けている彼らへの称賛——を届ける機会になると思います。

わたしたちは、来年も1年をとおして、彼らと連帯して祈り続けます。

わたしたちの希望、神よ、わたしたちはハイチの人々をあなたにゆだねます。わたしたちの理解を超えた無垢な人々を襲った苦悩に悲しみ、あなたに祈ります。必要な援助を届けようとする人々の心を奮い立たせてください。わたしたちは、ハイチの人々の深い信仰を知っています。苦しむ人々を支え、うなだれる人々を強め、嘆く人々を慰め、打ちひしがれた人々、そしてこの深く愛されている人々に、あなたの深い憐れみの霊を注いでください。

喜び

喜びに溢れた心、それがあなたのいのちです。悲しみを後ろに置き去るのです！¹ キリストのずっと前に生きた信仰者のこの呼びかけは、現代のわたしたちにも向けられています。

人生の中でわたしたちはさまざまな試練と苦悩を経験し、それはときに長期間にわたります。しかし、わたしたちは常に、生きる喜びを再発見してゆこうとします。²

この喜びは、どこから来るのでしょうか。

それは、予期せぬ出会い、長く続く友情、芸術的な創作、そしてやはり自然の美しさによって呼び覚まされます。

愛されるとき、幸せが生じます。この幸せは、徐々に、魂の深みを満たしてゆきます。³

そしてそのとき、わたしたちは自覚的な選択に招かれます。喜びを選択するようにと。

しばしば、貧困と剥奪に苦悩する人々の中には、自然に湧き起こる喜びを生きる人々がいます。それは落胆に立ち向かう喜び。⁴

¹ シラ書 30:22-23 参照。同様に、2世紀のキリスト者、ヘルマスはこう記しています。「明るさを身にまといなさい。……悲しみを脱ぎ去り、明るさを身にまとう人はすべて神のために生きるのです。」

² 人生を豊かに満たすものは、驚くような功績ではなく、心の深みに触れる静穏な喜びです。すべての人生における未完成さや不完全さは、苦しみにともな、なくなることはありません。しかし、そのことによってこの静穏さが奪われることはありません。

³ 正教会の神学者、アレクサンドル・シュメーマン(1921~1983)は、その日記にこう記しています。「喜びは、何の具体性がないときでも、確かに喜びなのだ。それは、神の現存の喜びと心の開放。そして、この確かな触れ合いと喜びの経験は、心のもっとも深いところを形成し、決して取り去られることがなく、生涯にわたるその人の思考と方向性を決定づける。」

⁴ ブラザー・ロジェと一緒にハイチを訪問したときに、そこで出会った人々のことを、今でも思い出します。あの美しい国で、人々は極度の貧困に置かれています。自分の子どもたちを、その日十分に養うことができるか分からない朝を迎えている母親たちが忘れられません。それにもかかわらず、大多数のハイチの人々にとっては、2010 年 1 月のあの壊滅的な地震でさえ、神への信頼を疑わせるものにはなりませんでした！

聖書は、繰り返し喜びへとわたしたちを招き、その喜びの源泉がどこにあるかを指し示しています。この喜びは、移り行く周囲の事情のみから来るものではありません。この喜びは、神への信頼から生じるのです。「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。主はすぐ近くにおられます。」⁵

キリストは、他の宗教と競う合う宗教を起すために来られたのでありません。キリストにおいて、神はわたしたちの状況を共有なさいました。それによって、すべての人が、永遠の愛で愛されていることを知り、^{コミュニケーション}神との交わりのうちに喜びを見いだすためです。神を信頼するとき、わたしたちの目は、人間性のすべてに対してさらに一層開かれます。——子どもへの母親の愛情、病人を世話する人々の献身……。これらの惜しみない行為のうちにキリストは存在します。——しばしば気付かれることなく。⁶

キリストは、人間に根本的な刷新をもたらしました。キリストは、まずご自身、その新しいいのちを生き、そしてそれに忠実であり続けることに葛藤されました。逮捕される前夜に、キリストはパンを割き、神秘に満ちたことばを語られました。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体。」⁷ そうです、彼は「言は肉となった」方なのです。⁸ キリストは、その不当な死をいのちの贈りものへと変容されました。死から復活されたキリストは、弟子たちに息を吹きかけて、聖霊——神のいのちそのもの——を伝え分かち合われたのです。⁹

聖霊は、復活されたキリストの喜びを、わたしたちの存在の深みに置かれます。この喜びは、すべてが容易に進むときにだけ、そこにあるものではありません。難しい役割を引き受けるとき、努力によって喜びが呼び覚まされます。そして、試練のときにさえ、この喜びは、灰に埋もれた残り火のように留まり続け、消えることはありません。¹⁰ わたしたちは、賛美の歌によって、この喜びを心のうちに湧き起こさせるのです。そして突然、この瞬間が光に照らされます。¹¹

憐れみ

喜びを選択するということは、人生の諸問題から逃げることはありません。それどころか、それは、現実と、そして苦悩にさえ向き合うことを可能にするのです。

喜びを選択することは、他の人間への思いやりと不可分です。それは、わたしたちを限りない同情で満たします。

神の喜びを経験することは、それがどんなに束の間のことであっても、すべての人を交わりを生きる者へと変容させます。幸せへの道としての個人主義は、幻想です。¹²

^{コミュニケーション}交わりを生きるということは、流れに逆らって泳ぎ続ける勇気が必要とします。苦悩する人のそばに留まり、耳を傾け、苦しい状況に共感する道を見いだすために必要な想像力を、聖霊が与えてくださいます。¹³

イエスに付き従いながら歩む幸せへの道は、自分に与えられた賜物を日々生きることに開かれています。毎日の生活をとおして、そして単純素朴さを生き抜くことによって、神の愛を表してゆくのです。

修道会、教会、青年のグループなどは、今よりさらに心からの親切と信頼の場所となるようにと呼ばれています。——それは、互いを歓迎し合うところ、他者を理解し支えようと模索するところ、もっとも弱い人々、周縁に追いやられている人々、自分より貧しい人々に心が向けられているところ。

い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。」(ヨハネによる福音書 16:22)

¹² ユダヤ人哲学者、マルティン・ブーバー(1878~1965)はこのように記しています。「恵みによって<なんじ>はわたしと出会う。——求めることによって見いだされたのではなく、<なんじ>に向かって、わたしが根源語を語りかけることは、わたしという存在のひとつの行為であり、それがわたしという存在であることの、まさにその行為なのだ。……わたしは、<なんじ>との関係をとおしてわたし自身となり、わたしが<われ>となることで、わたしは<なんじ>と言う。すべて真に生きるということは、出合いである。」

¹³ アルベルト・ウルタード(1901~1952)は、2005年に教皇ベネディクト16世によって列聖されたチリの聖人です。このイエズス会の司祭は、貧しい人々のためにその生涯をささげたとして、チリで尊敬されています。彼は、ホームレスの人々、困難な状況にある子どもたち、女性、そして男性がもてなしを受ける「キリストの家」を始めました。彼の全生涯と活動に貫かれたテーマは、次のような問いでした。「キリストならわたしの場所ですらどうするだろうか。」1947年に、彼は自身に委ねられている人々について、次のように記しました。「まず最初に、その人々を愛すること。……彼らの苦しみに耐えられなくなるまでに愛し抜くこと。……自分はぬくぬくと何一つ欠けることなく食べていながら、人々を惨めな状況のままにして、美しい言葉で慰める——わたしの使命は、そんなものにどどまるはずがない。彼らの苦しみは、どうしようもなくわたしの痛みなのだ。……彼らを愛することだ。彼らが生きてゆけるように、彼らのうちに人間らしいのちが育まれるように、彼らの心が開かれ、道端にどまることのないように。彼らを愛するならば、彼らのために何をすべきか分かるだろう。彼らはそれに応えるのだろうか。そう、ある程度は。……そして、愛のうちに言われたことは、何ひとつ失われることがない。」

⁵ フィリピの信徒への手紙 4:4-5

⁶ マタイによる福音書 25:35-40 参照

⁷ ルカによる福音書 22:19

⁸ ヨハネによる福音書 1:14

⁹ ヨハネによる福音書 20:22

¹⁰ アトス山の修道院の院長、バシル・ゴンディカキス神父は、このことについて、詩的な表現にあふれた神秘的な言葉で記しています。「生神女(聖母)に倣って、そしてその助けを得て、神の御旨に向かって開かれた、平和で澄んだ魂はみな、恵みによって『神の母』となることができる。死に打ち勝つ小さな喜びを宿し、うみだすことによる。」

¹¹ 受難を前にして、イエスは弟子たちにこのように言われました。「ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会

この時代のひとつのしるしは、悲劇的な自然災害の被災者を支援しようとやって来た実に多くの人々の寛大さです。この寛大さは、どのようにこの社会に、そして日々の生活にも、新しい力を吹き込むのでしょうか。¹⁴

緊急時に必要なだけの物質的な援助、それは十分ではありません。大切なことは、貧窮する人々に公正さを取り戻すことです。¹⁵

ラテンアメリカのキリスト者は、貧困との戦いが公正さを求める苦闘だということを、思い出させてくれます。それは国際関係における公正さであって、援助ではありません。¹⁶

わたしたちは、恐れを乗り越えることを学ばなくてはなりません。わたしたちは皆、他者の幸福を犠牲にしても、自分の安全を守りたいと求める自己保身に覚えがあります。そしてこれは、現代において不安感が高まるにつれて、ますます顕著になってきているようです。どのようにすれば、わたしたちは恐れに屈せずにいられるのでしょうか。それは、他者に対して、さらに脅威と思われる人々に対してさえも、手を差し伸べることではないでしょうか。

移民もまた、この時代の象徴です。それが脅威だと受け取られる場合もありますが、それは広がりつつある現実であり、すでに将来の姿をなしはじめています。¹⁷

¹⁴ 教皇ベネディクト 16 世は、英国訪問中に次のように訴えました。「『失敗するにはあまりにも大きい』と、金融機関を救済するためには、各国政府は莫大な資源を費やすことができるということを、世界は目の当たりにしました。間違いなく、世界の人々の統合的な人間の発展は、これより重要ではないはずがありません。世界中の注目に値する営みがここにあり、それこそ本当に『失敗するにはあまりにも大きい』のです。」

¹⁵ 「貧しい人々に分け与えているものは、あなたの持ち物ではありません。あなたは、単に彼らの持ち物を返しているだけです。皆で用いるようにとすべての人に対して与えられているものを、自分でひとり占めしていただけからです。大地はすべての人のもので、富める者だけのものではありません。しかし、大地を耕す人々を犠牲にして、ひと握りの人々がそれを独占しています。ですから、あなたは無償の施しをするどころか、自分の負債を支払うのです。」(ミラノのアプロシウス、4世紀)

¹⁶ アパレシーダで行われた会議(2007年5月)の最終文書で、ラテンアメリカ・カトリック教会は、次のように記しました。「公益のために働くということは、経済、金融、世界貿易の公正な規制を進めるということを意味します。開発への投資と社会的支出を促すために、対外債務の重荷が取り除かれることは極めて重要です。投機的な資本の移動を防止・抑制するため、フェア・トレードや強者による保護主義的な障壁の緩和を促進するため、そして貧困にあえぐ国々によって生産された原料に適切な価格を保証し、投資・サービスの呼び込みや管理のための公正な規制を確保するために、世界的な規制が設けられなければなりません。」

¹⁷ もちろん、移住には規制が必要です。しかし、それは外国人への恐れによってではなく、彼らの融合を考慮した心からの思いやりによるものでなくてはなりません。移民にとっては、住居や仕事を見つけること、また言葉を学ぶことが優先事項です。受け入れる国にとっては、権利を認めることは、適度な税負担を期待することと切り離して考えることはできません。このような状況においてキリスト者への招きとは、ただ外国人だからといって、外国人を恐れることが正当化されないということ、その生き方によって示すことなのではないでしょうか。互いに知り合うこと、そして相手のことを知ることは、無知から生じる恐れを乗り越える第一歩かもしれません。

さらなる現代の象徴は、豊かな国で、ますます広がる貧困です。これらの国では、見捨てられることと孤立が、主に経済不安を引き起こしています。

物質的な所有物を過剰にためこむことで、喜びが失われてしまいます。それによって、わたしたちは妬みに捕らわれ続けるのです。幸せはもっと別のところにあります——単純素朴な生活スタイルを選ぶことに。利益のためではなく、生きることに意味を与えることのために働くことに。他者と分かちあうことに。そのとき、すべての人が平和な将来の創造を担うことができます。神は、おくびょうの霊ではなく、愛と内なる力の霊をわたしたちにくださるのです。¹⁸

ゆるし

福音は、さらに先へ進むようわたしたちを励まします。正義は、必ずゆるしへと繋がります。人間社会は、ゆるしなしにあり続けることはできません。世界のさまざまな場所で、傷あとの深い歴史があります。ですから、わたしたちは、今日終わらせることができることには、敢えて終止符を打ちたいのです。そのようにして、神の御心のうちに備えられている平和の計画が、完全に明らかにされます。

神のゆるしを信じるということは、不当な行為を忘れることではありません。ゆるしへの招きが決して不正義を容認するために利用されることがあってはなりません。それどころか、ゆるしを信じることで、わたしたちは自らの過ちに気づくと同時に、わたしたちの周りや世界での誤りと不正義にも気づくように、より自由にされます。すばらしいものを生み出す可能性のあるあらゆるものを修復するかどうかは、わたしたち次第です。このような困難な歩みのなかで、わたしたちには欠くことのできない助けがあります。それは、教会という^{コミュニオン}交わり。そのうちに、神のゆるしは再び与えられます。

¹⁸ テモテへの手紙二 1:7 参照

今後予定されている「地上における信頼の巡礼」

2011年4月20日～25日、ロシア正教会の教会とともに聖週間と復活祭を祝うため、ブラザー・アロイスおよび他のブラザーたちがヨーロッパ全土から集まった青年たちと一緒にモスクワを訪れます。

日ごとの糧が必要であるのと同じように、どんな人間にもゆるしが必要です。¹⁹ そして、神は、いつも無条件にゆるしてくださいます。「主はあなたの罪をことごとくゆるす。」²⁰ 祈りながら両手を開くことは、そのゆるしを迎えたいというわたしたちの願いを表す単純なしぐさです。

「わたしたちの罪をおゆるしてください、わたしたちもゆるします……。」主の祈りの中で、わたしたちがこのように祈るとき、神のゆるしがすでにわたしたちに触れています。これらはむなしい言葉ではありません。イエスご自身が教えてくださったこの言葉を祈るときに、何かが起こるのです。そしてそのとき、不当な扱いを受けても、相手を断定的に裁くのではなく、今度はわたしたちがゆるそうとするのです。

キリストは、常に人とその人が犯した罪を区別されました。十字架の上で最後の息を引き取るまで、キリストは誰を裁くことをも拒まれました。過ちを最小限とどに留めるのではなく、それを自ら引き受けられたのでした。

どうしてもゆるすことができないという状況があります。傷が大きすぎるのです。そのようなときは、神のゆるしに失敗はないということを思い出すのです。わたしたちにとって、人をゆるすという道は、ほんの一步ずつかもしれません。そして、ゆるしたいというあこがれは、すでに最初の一步です。——たとえ、そのあこがれが苦い思いに包まれたままであったとしても。

¹⁹ シュザンヌ・ド・ディートリッヒ(1891～1981)というプロテスタントの神学者は、テゼが始まったときに、共同体においてためらわずに終生の誓願をたてるように、ブラザー・ロジェと最初のブラザーたちを励ました人物で、次のような言葉を記しました。「キリスト者というのは、ゆるしを生きる人、自分が神の戒めに日々背いていることを知っていながらも、日ごとに神に立ちかえり、揺るぎない確信をもって、自分の人生について最後の言葉は神から発せられるのだと知る人です。キリストは御父の前でその人を引き受け、彼について責任を担われます。葛藤の中で、その人は独りではなく、彼が自分自身を差し出した御方は、決して彼を見捨てません。キリスト者の確信というのは、その本人の現在のあり様に基づくのではなく、神という存在に、イエス・キリストにおいて明らかにされた神の誠実さと愛に基づくのです。だからこそ、キリスト者の成長はその人を盲目にすることがなく、敗北は彼を落胆させることがないのです。キリスト者は、いつでもまた立ち上がります。それは、その人が自分自身に属するのではなく、別の御方に属するからです。」

²⁰ 詩編 103:3 を参照。この詩編 103 はすべて、神のゆるしについて詠ったものです。そして、預言者イザヤは、陰鬱な時代に、神はつねにゆるす方だということを人々に次のように語りました。「わたしはあなたの背きを雲のように吹き払った……」(イザヤ書 44:22)

ロッテルダム大会の間に、第 34 回青年ヨーロッパ大会の開催地が発表されます。大会は、2011 年 12 月 28 日から 2012 年 1 月 1 日にかけて行われます。

ロッテルダム大会のために寄せられたメッセージ：
<http://www.traize.fr> をご覧ください。

ゆるすことによって、神は過ちを拭い去ってくださるだけではありません。ご自身の友情をとおして新しいのちを与え、聖霊によって昼と夜とを再び輝かせてくださいます。

神のゆるしを迎え入れ、分かち合うことは、キリストが開かれた道です。わたしたちは、自らの弱さや傷を抱えながら、その道を歩みます。キリストは、わたしたちをすでに目的地にたどり着いた者にしようとはしておられません。

わたしたちは、福音における貧しい者です。キリスト者であるということは、他の人々よりも優れていると主張することではありません。わたしたちを特徴づけているのは、キリストに従うという選択です。その選択を、わたしたちはどんなところでも、一貫して生きたいのです。²¹

そして、わたしたちは皆、発見するのです。ゆるされ、またゆるすとき、喜びが生まれるということ。ゆるされたということを知ることは、もっとも深い解放の喜びのひとつです。それは、キリストがわたしたちに伝えようと望んでおられる、内なる平和の源泉です。その平和は、わたしたちをどこまでも導き、外へ向かって溢れだすのです——他者へと、そして世界に向かつて。²²

f. Alois

²¹ 「すべての人間は疑いなくイエス・キリストに帰属するが、キリスト者は、ただ同じようなあり方でキリストに属しているというだけにとどまらない。イエス・キリストがこの世でなす働きが、彼らの行動の意味であり、闇のなかでの闇に対するイエス・キリストの戦いこそが、彼らが自らを捧げる理由となる。そのような形でイエス・キリストに結びつけられているのだ。」(カール・バルト、1886～1968)

²² 19 世紀のロシアの修道士、サロフのセラフィム(1759～1833)はこう記しています。「自分の内側を平和にしなさい。そうすれば、あなたの周りの何千もの人々が救われます。」